

29. コンゴ川

アフリカ大陸最大、アマゾン川に次いで世界第二位のコンゴ川についてです。全長4,700km 流域は赤道直下、水源は南半球、そして中流域のコンゴ第三位の都市キサマンガニは赤道直下でありここから北半球に入りコンゴ盆地を大きく半円形を描いて再び南半球に入って大西洋に注ぐ大河です。流域が赤道付近ですから1年中雨が降りそれも平均2,000mm ですから我が国よりもは



①

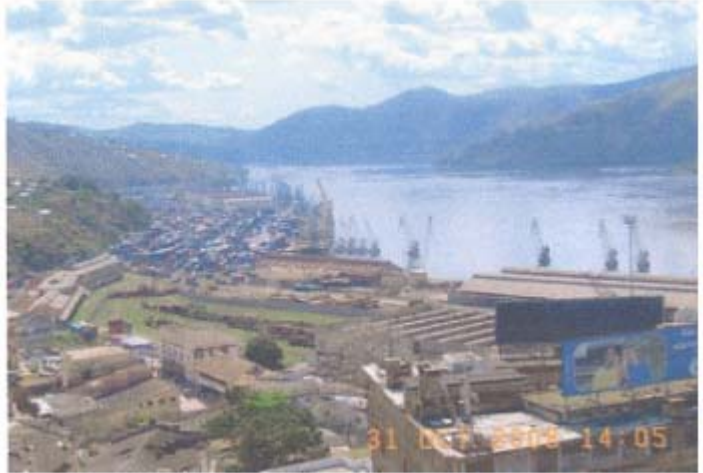
るかに多い雨量です。したがって熱帯雨林がおいしげり流量も1年中安定しており、その水量はアマゾンに次いで世界第二、そして地下資源は銅、コバルト、ダイヤモンド、カドミウム、銀、亜鉛、マンガン、錫、ゲルマニウム、ウラン、ラジウム、ボキサイト、鉄鉱石、石炭、決して化学の知識を披露している訳ではありません。これらは全てこの国で採掘されている鉱物資源なのです。

そしてこれらのほとんど輸出されています。従ってアフリカでは最も恵まれた国なのですが、残念ながら世界最貧国になったこともある国で、現在でもそれに近い不名誉な国なのです。では何故最貧なのか、答えは簡単で内戦に次ぐ内戦、いわゆるコンゴ動乱から連続で起きた内乱です。これも地下資源がありすぎるが故の利権争い、先進国のエゴが絡んできます。

さて歴史の経緯は後にして、コンゴ川を遡航してみます。この航海はアメリカからコンテナを積み出し、コートジボアール共和国のアビジャン港で揚げ切りでした。この街は完全にフランス風でフランス人も多数住んでおり、公用語はフランス語、街でのショッピングも全てフランス語でした。屋台でバナナを買ったとき店番をしていた10歳位の女の子が私のフランス語の発音がおかしいとケラケラと笑っておりました。

空船になって次はコンゴのマタディで銅のインゴットを積みと指令電報がきてコンゴ川に向かったのです。しかしそう簡単にいかないのが世界情勢、コンゴは内陸にあるコンゴ盆地が中心ですが、コンゴ川河口は分離独立を意図するカビンタでここを国際的傭兵だったキューバ兵が駐屯しているとのこと、もしかしたら撃たれるかもしれないのでその時は引き返せと無責任な電報が届き、撃たれて火災か起きるか、穴の開いた船でどうやって大西洋を横断するんだ、アフリカには全くドックは無いのだぞーと毒づいたところで指令は絶対 恐る恐る河口に近づき、もし撃ってくるならその前に警告があるだろうから、その時引き返せば良いと勝手に解釈して河口に近づきましたが、それらしい兆候はなし、双眼鏡で左岸を注視しておりましたが見張をしている様子もないので無事通過、右岸はアンゴラ人民共和国でルアンダの悲劇があった国で共産政権が樹立しているこれもまた怖ろしい国なのです。なんでまー怖ろしい航路ばかりやらされるんだろうとボヤいてもしょうがない、これも宿命と諦めて、

コンゴ川遡航開始、ブイ、航路標識、導標、パイロット全て無し、しかも水量が多く流れも速く操舵が緊張の連続、カーブも多く、河口から目的港のマタディ迄は120km、流速が早くスピードがでず、途中で日が暮れたのでブイの灯火がないので航行不可能となり、やや岸寄りにアンカーしました。河口から50km位の所にアンカーしたのですから普通の河川ですとこのくらいまで潮が昇ってきて流れが変わり、船はアンカーを中心として半回転するのですが、このコンゴ川は水量が多く流れも早いので潮が昇らないので船は川上を向いたまま微動だにしないのには驚きました。岸には人家が多くあったのですが夜は漆黒の闇、電気が無い原始の世界でした。船は存在を示すため作業灯の全灯を点灯しておきました。朝起きて驚いたのは甲板一面黒いもので覆われています。何事ならんと甲板に降りて



②

みたら かぶと虫のような昆虫の死骸が層になっていました。初めてみた明かりに昆虫が群がり甲板に落ちたようですが、船橋で当直に就いていた職員に聞くと作業灯が暗くなるほど虫が群がり落ちてきたとのこと、ドアは全部締め、開いているところも全て蓋をして防いだと言っておりました。さすがアフリカと驚きましたが、現地の人に聞くと大草原があって牛や家畜を飼おうとしても虫にやられてしまい駄目なんだそうです。朝一番の大仕事は全員カップを着用して消火ホースで虫を流す事ですが排水溝が詰ってしまうのでスコップで掻き出しながらの作業で航走しながら3時間の大仕事でした。どうにか目的港マタディに接岸、左岸だけの港で対岸である右岸は岩山です。川が大きくカーブしている内側に岸壁があり、これだと川の流れの影響をあまり受けず安心です。

さて入港手続き、公用語はフランス語、全員が流暢なフランス語を話し、例によってアフリカ式手続きが延々と続きタバコが何カートンかの贈呈で無事終了、荷役の書類作成で代理店ヘジープに同乗して出かけましたが、市街地は急な坂を登ったはるか丘の上であり人口約25万人首都キンシャサに次ぐ都市で、なるほどジープでなきゃ駄目と思う位の高台です、ついでに街を案内してくれましたがここから先はアンゴラ人民共和国だとのことゲートがあって警備の兵隊が立哨しており街の外れは外国と国境の街です。帰りに一寸寄り道してコンゴ川を渡る吊り橋であるマタディ橋、別名モブツ・セセ・セコ元帥橋、ご存じでしょうか悪名高き独裁者モブツ大統領の名です。この吊り橋は橋長722m、スパン（最大支間長520m）我が国の資金、資材はIHI、設計、施工全て我が国で1983年に完成しており、河口から120km上流にあるこの橋が唯一の橋です。案内してくれた担当者はさかんに吊り橋の素晴らしさを自慢していましたが、何処の国が造ったのかは全く無関心のような様子でした。

マタディから上流350kmのところには首都キンシャサがあり、ここがコンゴ盆地の各地で生産されるコーヒー、ココア豆、綿花等の集散地で、鉱物資源もここを経由して運ばれています。ですからここ

まで貨物船が遡航できればよいのですが、コンゴ盆地は高原にあり、その一角にあるキンシャサと海岸平野にあるマタディとの間の高低差は大きく、従ってコンゴ川は峡谷となり急流の連続で瀑布もあってこの間の全体がリビングストン滝と呼ばれているくらい凄いのです。ですから船の航行は一切できず、キンシャサ～マタディ間は鉄道輸送に頼っています。ところがこれが余り機能せず悩みはインフラ整備の遅れに尽きます。

さて積み荷は銅のインゴットですが、これを1本1本並べローリングで崩れないようしっかりと固定します。精製された金属ですからそれほどの量はなく、残ったスペースは麻袋に入ったコーヒー豆の積み込みですが、これが頭を悩ませるのです。袋は積み重ね厳禁、できる限り風が通るようにブラ下げる、つまり洗濯物を干すようにしろとの要請、風通しが悪いと風味が落ちて商品価値が落ちる、もし落ちたら船長の責任だと脅迫され、難題に次ぐ難題にこちらも意地になってロープを船倉内に張り巡らして何とかブラ下げに成功、2週間の荷役でヤット終了、クリアランス（出港許可書）も出たので、翌朝早く離岸しましたが、タグボート、強制パイロット一切なし、すべて船側だけの離岸作業でハイサヨウナラ、荷役2週間の間 他的大型外航船の出入港、荷役は無し、川を航行中も反航船はゼロ、よほど暇な貿易港だと感心し、コンゴ唯一の貿易港がこれでは同国経済はどうなっているのか心配になってきました。

さてこのコンゴ共和国ですが、よくまあこれだけの凄まじい悲劇の連続に耐えてきた国だと感嘆しますが、実は私が行った時期は内乱が最も凄まじかった頃で、他の船舶を全く見なかったのは各国、各海運会社は配船を見合わせ自重していた頃なのです。道理で他の船舶を見掛けない訳です。また何か街の様子も変でした。どうしてもよい捨て駒に行くことを命じ、何も知らない本船は命じられた通り見事完遂、知らぬが仏とはこのことで、オーナーがユダヤ系なので非情に徹し、経済最優先は流石と感心し、何も知らずに行ったのは単なる無知、しかし上司として接してきたユダヤ系の人達のその凄さ、優秀さには圧倒され2千年も流浪している民の底力を垣間見ることが出来ました。

コンゴの歴史を見ましょう。1885年ベルギー国王の私有地とし、1908年ベルギー領コンゴ、1960年コンゴ動乱ベルギー正規軍が介入し、ルムンバ首相は殺害され混乱は続き、その間 国連事務総長ハマーショルド氏が調停に現地入りしようとして搭乗していた専用機が墜落、当時はソ連による撃墜説、謀殺等々情報が飛び交いましたが当時は未だフライトレコーダーの設備はなく真相は判らずじまいでしたが、しばらく経って墜落機の綿密な調査によりパイロットの操縦ミスと思われる2度の発表で終わりました。

1965年モブツがクデターに成功し、それから1995年までの30年間で悪名高きモブツ・セセ・セコ大統領・独裁者・皇帝・元帥の悪政が続き国民を苦しめるのです。では何故このような人物が長年独裁者でいられたのか。それは当時の国際情勢でその根本は米ソ対立です。特にアフリカは両雄の対決の場であり、草刈り場なのです。ソ連の猛烈なアタックにより共産政権国が相次ぎ、これに焦ったアメリカは防共の砦としてコンゴに白羽の矢を立て、特に豊富な地下資源をソ連に渡したくない政策があったのです。コンゴの東部にあるウラン鉱から採掘したウランを急遽アメリカへ運び、広島に投下

した原子爆弾のウランがこれです。ですからアメリカとしてはコンゴは死守すべき砦だったのです。

これを指揮したのが当時のブッシュ CIA 長官、後の大統領、そして先の大統領の父親であるブッシュ氏です。そこで防共の砦の城主たるモブツ大統領に多額の援助を与えます。大統領は防共さえ唱えていればドルはどんどん入って濡れ手に粟、後は悪政のしほうだい、ネコババした金額は 50 億ドル、ジャングルの中に飛行場のある宮殿を造りこれを私邸とし、別名ジャングルのベルサイユ宮殿、国民は天文学的なインフレに悩まされ、経済は破綻、内乱は各地で引きも切らず、それでも我関せずの贅沢三昧、それでも政権が続いたのはアメリカのバックアップがあったからです。

ところがソ連の崩壊、防共の砦の必要が無くなった途端、アメリカはスッパリと切り捨てドル援助が無くなったモブツ大統領の命運は尽きるのです。

しかし長年の悪政による荒廃はそう簡単には回復出来ず、特に新しく造らねばならないインフラの整備は大変です。そこで問題となるのは人材不足でしょう。長年の混乱で学校教育がママならず、就学率、識字率が他国に比して極端に低いのです。長期的な視野に立ち国造りに邁進すれば必ずやイイ国ができるはずです。そのためには学校教育からの出直しです。我が国の成功は明治維新、第二次大戦での焼け野が原、その中で最初に着手したのが学校教育、六三制の実施で全ての市町村が乏しい予算の中で新制中学の校舎を建設したのは見事でした。この国も人材が育てばきっと成功します。なにしろ世界有数の地下資源を有し、そして最大の利点は雨量が多くしかも 1 年中降雨があることは農業や国民生活にどれほど有利に働くことか、きっとイイ国になります。

写真

- ① 一見湖のようですが、水量豊かなコンゴ川です。この地点で 90° 曲がっているので急流です。ところどころ渦を巻いています。
- ② マタディ港、川の流れが大きく曲がった内側に岸壁があるので比較的流れは穏やかで、潮の影響がないのでやや安心です。街は遙か山の上にあります。

